講義

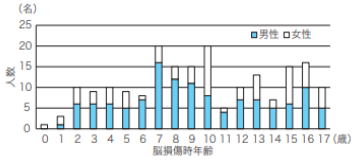
ライフステージに応じた支援
小児期における支援

1

1．小児高次脳機能障害の特徴

① 小児高次脳機能障害者の実態調査 （野村ら，2019）

・発症時年齢
中央値9.8歳



n ＝196

2

・原因疾患
外傷性脳損傷が最も多く，次いで脳血管障害，脳炎・脳症，脳腫瘍，低酸素脳症の順。

原因は多彩である。

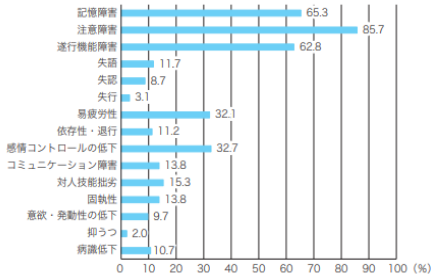
脳炎・脳症は他の疾患よりも低年齢。

	外傷性脳損傷群	脳血管障害群	脳炎・脳症群	脳腫瘍群	低酸素脳症群
人数（%）	109人（55.6%）	35人（17.9%）	27人（13.8%）	17人（8.7%）	8人（4.1%）
脳損傷時年齢（中央値）	10.6歳	10.5歳	5.1歳	10.3歳	7.1歳

野村ら（2019）より一部抜粋

3

・高次脳機能障害の症状



（野村ら，2019）

4

② 発達期に障害を負うということ

子どもは成長過程にあり，発達段階がある

↓

高次脳機能障害により，発達課題を乗り越えることがより一層難しい。不適応に陥りやすい。
➡ 障害特性に応じた支援が必要

5

社会復帰先は「学校」である。

成人に比し，社会復帰が早い。
同年齢の子どもたちの成長発達はどんどん進む。
学習内容は高度に，友人関係は複雑になる。
進級や進学により学校環境は変化する。

卒後の社会参加（就労）を目指していく。

↓

その子なりの改善や変化が見えにくく，自己肯定感が育ちにくい。
➡ 心理的サポートが必要

進級・進学により新たな環境への適応が求められる，支援者も変わっていく。
➡ 連携・協働による長期的な支援が必要

自己の障害理解を深め，対処行動を獲得し，環境調整が求められる。
➡ リハビリテーションや心理教育の提供

6

2．症状と対応方法

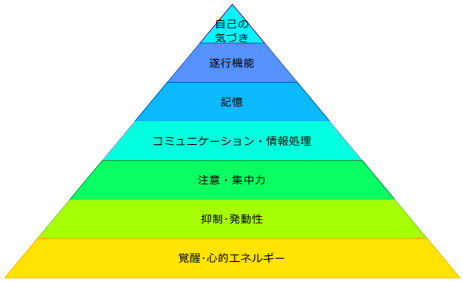
- 高次脳機能障害という観点から要因を考え，対応方法を検討
- 発達途上であることを考慮し、受傷発症前との違いについても情報収集
- 子ども本人の困り感や障害認識を確認
- 卒後の社会参加を見据えて継続的に支援

※発達障害の支援から応用できるものもある
※子どもの動機づけを高める工夫をプラス

7

神経心理ピラミッド

Yehuda Ben-Yishay. 大橋正洋 監修，立神粧子 著（2010）より改変



8

① 注意障害

- 集中が続かず，ぼんやりすることがある
- 2つのことを同時にやることが難しい
- 聴こえた音や見えた物に逸れやすい
- 人の話を最後まで聞けない
- うっかりミスが多い

9

注意障害の対応

- 注意を引き付けてから伝える
- 用件は１つずつ伝え，確認する
- やるべきところを具体的に伝える
- やり方の順番や予定を示し、見通しを持ち取り組み続けやすくする
- 指さし，見直しなどの代償行動を促す
- 耳・目から入る刺激を少なくする（環境調整）

10

② 記憶障害

- 同じことを何度もたずねる
- 忘れ物や失くし物が多い
- 先生や友人の名前が覚えられない
- 授業や活動の内容を思い出すことが難しい
- 約束を忘れる

※印象に残ることは憶えていることが多い
※発達障害の支援からは応用しにくい

11

記憶障害の対応

- 代償手段の活用
  予定・出来事を確認できる手段の獲得を支援
  例）学校の連絡帳，自宅のカレンダー，市販の手帳，スマホ・タブレットのスケジュールアプリ，カメラで撮影など…

- 環境調整
  手がかりを視覚化する
  物の保管場所や実施手順を一定にする
- 学習方法の工夫
  語呂合わせ，合体漢字など印象深く覚える工夫を

12

③ 遂行機能障害

- 指示しないと行動できない
- 学校の支度や部屋の整理整頓が一人ではできない
- 思いついたことをやり出し，行き当たりばったりの行動が多い
- すぐにあきらめてしまい試行錯誤できない

13

遂行機能障害の対応

- 前もってやり方を伝える
- 優先順位をつけてあげる
- できることから少しずつ手順を増やしていく
- 手順書を渡してそれを見ながらやってもらう
- 困った時の対処行動を決めておく

14

④ 社会的行動障害

- 依存性・退行
  甘える，自分ではやろうとしない，やってもらいたがる
- 感情コントロールの低下
  すぐ怒る・キレる・泣く・暴言をはく，ふざける

- 対人技能拙劣
  協調性が乏しい，相手の気持ちが読めない
- 固執性
  こだわり，変更されると混乱する
- 意欲や発動性の低下
  やる気が出ない，ぼんやりしている，興味を示さない

15

社会的行動障害の対応

- 依存性・退行，意欲・発動性の低下
  集団活動への参加を促す
  日課や役割を作って促す
  まずは一緒にやり，次第に一人でやることを増やす

- 固執性
  メリット・デメリットを伝えて修正を促す
- 対人技能拙劣
  本人と相手の思いを具体化する，SST（Social Skills Training）を活用

16

社会的行動障害の対応

- 感情コントロール低下
  原因を見つけて減らす・取り除く（環境調整）
  場所を変えてクールダウン or 許容できる方法で発散
  アンガーマネジメントの手法で対処行動を学ぶ

★アンガーマネジメントとは…
怒りや悲しみ、不安などの混沌とした否定的感情に気づき，適切に表現したり，
問題解決ができるようになることを目指すもの。

※思春期ではより一層対応に難渋することがある
※原因は多角的に検討し、
小さな変化を大きく肯定的にフィードバック

17

⑤ 神経疲労（易疲労性）

- 脳の疲れにより，できる時とできない時のムラが生じる

- 疲労のサインを見つけよう
  - ぼーっとなる，姿勢が崩れる，あくびをする
  - そわそわする，おしゃべりが止まらない

18

神経疲労(易疲労性）への対応

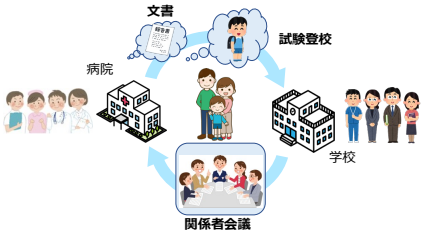
・疲れのサイン ➡ 休憩を取る
ストレッチ，手を止めて少し休む，
深呼吸をする，水分を摂る，トイレに行く，

保健室で休む，自宅でゆっくり寝る

疲れた時に休む＝充電
※はじめは支援者の誘導 → 自発的な対応へ

19

3. 復学支援（学校との連携）



※復学や進学の時、できれば各学期や年度毎にも、学校生活への適応状況や支援の必要性を確認・検討しましょう。

20

・復学
大半は受傷発症前に在籍していた学校への復学を望む
身体障害，ADL，言語機能，認知機能などの状態に応じて，適した学校環境を選択する。その中で子どもの能力を引き出す手立てを用意する。

※ 合理的配慮 （障害者差別解消法 H２８/４月～）

障害のある児童生徒等に対する教育を小・中学校等で行う場合には、「合理的配慮」として以下のことが考えられる。
（ア）教員、支援員等の確保
（イ）施設・設備の整備
（ウ）個別の教育支援計画や個別の指導計画に対応した柔軟な教育課程の編成や教材等の配慮

21

・試験登校
本格的な復学の前に慣らし登校をする。
公的な制度や仕組みはなく，学校と調整が必要。
子どもや親の安心につながる。
受け入れる学校や友人は心構えや準備ができる。

・関係者会議
復学時，進級や進学時，学校不適応の時，就労に向けた支援が必要な時，などに実施。
受傷からの経過，障害や症状と対応方法や配慮事項を共有し，課題について協議する。

22

・教育資源に関する情報提供
経過の中で，特別支援学級や通級指導教室の利用，特別支援学校やサポート校への転校など，利用可能な教育資源や相談機関の情報を提供。

※参考資料
全国特別支援学校病弱教育校長会
「病気の子どもの理解のために － 高次脳機能障害 － 」
http://www.zentoku.jp/dantai/jyaku/h25kouji_nou.pdf

23

4. 家族支援

子どもを支える家族 ＝ 親（保護者）
親は受傷・発症への複雑な思いを抱えている

障害を正しく理解し対応できるように ➡ 家族指導

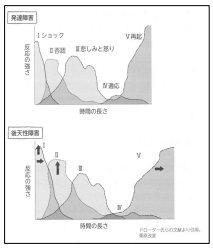
親の気持ちに寄り添い支援する ➡ 心理的サポート

復学や就学，進学，特別支援教育の利用，卒後の社会参加(就労）などの相談が求められる
➡ ライフステージに沿った情報提供や支援の提供

同じ境遇の仲間との出会い ➡ ピアサポート，家族会

24

家族の障害受容



- 後天性脳損傷の子どもを持つ親の障害受容は，先天性障害の子どもを持つ親と同じ経過をたどる．反応の仕方がより強く、再起により長い時間を要する．
- 池田ら（2009）
  学齢期の高次脳機能障害児の保護者調査
  75名中29名が子どもが障害を持ったことに対し心の整理がつかない．

栗原まな「よくわかる子どもの高次脳機能障害」より

25

ピアサポートの活用

- 家族会の意義（鈴木, 2010）
  当事者と家族は，互いに支え合う仲間に出会える。
  会を支える専門職は，臨床上の視野を広げる上で有益である。
- 小児高次脳機能障害の家族会　12か所（2020/11月時点　※次頁）
- JTBIAキッズネットワーク（2013年9月～）
  各地の小児高次脳の家族会と支援に携わる専門家の全国ネットワークが発足した。年1回の宿泊イベント，ＭＬにより活動報告などの情報交換が行われている。

26

小児高次脳機能障害の家族会

都道府県	会の名称
北海道	NPO法人脳外傷友の会コロボックル 学齢期親の会
埼玉	ハイリハキッズ埼玉
東京	ハイリハキッズ 高次脳機能障害の子どもを持つ家族の会
東京	ハイリハジュニア 中学生～大学生の高次脳機能障害当事者と家族の会
神奈川	アトムの会 後天性脳損傷の子どもをもつ親の会
神奈川	川崎市高次脳機能障害の子どもを持つ家族の会エルダーフラワー
愛知	NPO法人脳外傷友の会みずほ　キッズプラス
富山	NPO法人脳外傷友の会高志　高志キッズ
福岡	NPO法人福岡・翼の会　つばさジュニア

他にも静岡，福井，長崎など増えつつあります

27

まとめ

- 後天性脳損傷による高次脳機能障害の子どもたちは，成長・発達の途上にあり，それぞれの発達課題と高次脳機能障害による課題を乗り越えていくことが求められる。
- 卒後の社会参加に向けて，自己の障害認識を育み，必要な対処行動を獲得していけるように支援が必要である。
- 保護者をサポートし，家庭・医療・教育・福祉の連携による，長期的な支援が重要である。

28

文献

- 野村忠雄, 太田令子, 吉永勝訓, 栗原まな, 片桐伯真, 武居光雄：小児高次脳機能障碍者の実態調査. Jpn J Rehabil Med, 56, 908-920, 2019.
- Yehuda Ben-Yishay, 大橋 正洋監修,立神 粧子 著：前頭葉機能不全　その先の戦略　Rusk通院プログラムと神経心理ピラミッド. 医学書院, 東京, 2011.
- 栗原まな：よくわかる 子どもの高次脳機能障害. クリエイツかもがわ, 京都, p.54, 2012.
- 池田理恵子, 髙橋智：学齢期の高次脳機能障害児の困難・ニーズと支援に関する研究 -保護者調査から―. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 第60集, 293-321,2009.
- 鈴木勉：高次脳機能障害児者の当事者・家族会活動への支援. コミュニケーション障害学, 27, 38-42, 2010.

29

© 厚生労働科学研究：高次脳機能障害の障害特性に応じた支援者養成研修カリキュラム及びテキストの開発のための研究班

30